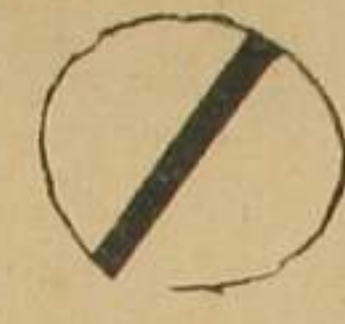




星 冬 初



章

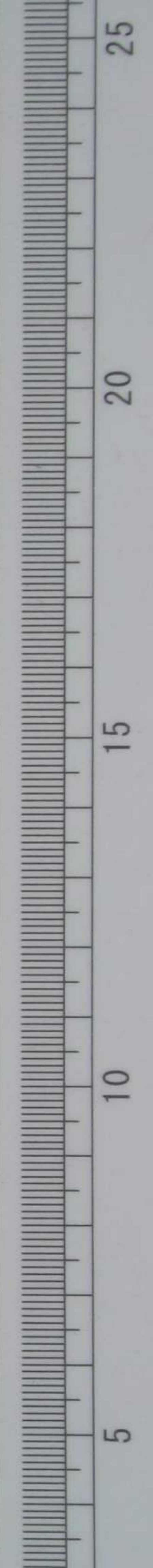
短



ト、レフンパ 秋 白

3

スルア座銀京東・刊月八年二二九一





白秋パンフレット

- 第一輯 短唱 月光微韻 既刊  
第二輯 短章 落葉松 既刊  
第三輯 短章 初冬の星 既刊  
第四輯 詩集 動き来るもの 九月刊  
第五輯 民謡體短章 薄陽の旅 九月刊  
第六輯 小唄 雀の頭巾 九月刊

定價各册參拾錢 送料貳錢

### 白秋パンフレットの言葉

この白秋パンフレットはわたし自身の詩歌、小品、評論、隨筆等、その種類の何たるを問はず、成るに従て隨時一々の小冊子として刊行するものである。たとへば一壺の甘藍若くは一題の林檎のごとく、新鮮に、而かも最も簡易に衆人の眼に觸れ手に觸れ心に觸れむことを希ふものである、わたくしは貧しかった。それ故にかうした値廉きこの種の刊行はかゝるの本願であつた。で、わたくしは同時に童謡或は民謡の普及版をも順次に公刊する。ただ此のパンフレットは如上の二種の歌謡を除き、その他の創作、中にも主として新作を旨とするつもりである。なほ、未刊の傑作、或は既刊の物でも極めて特殊な品として分冊の必要がある場合には、稀には輯録することもあるだらうと思ふ。而して世の富者には一方思ひきり贅を凝らした高價の珍蔵書として類別蒐集したい微笑をも許してほしく思ふ。

大正十一年夏

北原白秋

# 初冬の星

短章

北原白秋著

白秋パンフレット第三輯

小序

眞實の相を眞實に觀む。その相のたましいを、その命を觀む。ただ愛と睿智とは書開けし初冬の星の光さへもその眼にその神に捉へ得て更に幽かに澄みわたらむさす。草に草を觀、石に石を識る。此の心はやがておのれと通ずる山水の、彌が上にも窮りなき同じ流れの命をも識るに到つて光らむ。觀るもの一つ一つの忝さ。讀者よ、かくて我が此等の短章は成れり。

白秋



## 丹澤山

丹澤山のあなたに  
 澄みつつ青き空あり。  
 つづきて目に見ぬ空あり。  
 つづきて遠き空あり。

## 冷めたき

冷めたき空の高處たかどに  
 幽こもりかに満つるものあり。  
 つくづく見れば闌たけつつ、  
 晝ひるなほ光る星あり。

冬の裏山

やどり木

あらはに透いて冴ゆるは  
高いけやきのやどり木、  
丹澤山の北風。

女松

つめたく澄みて明るは  
赤い女松の幹立、  
その枝の薄い葉の際。



櫟原

薄い日ざしに明るは  
山でかやの實、  
蘇枋<sup>すはう</sup>の實、  
くぬぎ林のくぬぎの實、  
栗の根元のおち栗。

けやき

こまかき櫟のこすゑに  
暮れつつ光るものあり。  
枯木の枯<sup>か</sup>れし明りは  
空よりさらに澄みたり。

篠原

やや薄黄ばむ小篠に  
陽のあるほどのけざむさ。  
見つつし行けば明るく、  
かへり見すれば風あり。

松が根

ひと時明<sup>あか</sup>る松が根、  
その根にそよく、穂薄<sup>ほすく</sup>、  
通りすがりに見上げて、  
山坂のぼる、日の入り。

山みちに

山みちに  
目につく花は松蟲草、  
冬の日の入り、松蟲草。

函嶺にて

岩

日の照る岩のけざむさ。  
草木瓜の赤さ。

## 瀧

日の照る杉のうしろに、  
 さむざむ落つる聲あり、  
 岩より岩へ、が涸れつつ、  
 落ち來る瀧のかすけさ。

## 溪流

かの山裾に光るは  
 細溪川のうねりか、  
 日の射し來ればかがやき、  
 かげればとみに音立つ。

## 薄日

岩から岩へとかける陽、  
 しばし薄に、留まりて、  
 高く吹かるるさびしさ、  
 寒くかがやくさびしさ。

## 弦月三章

## 初夜過ぎて

初夜過ぎて出づる月に  
 影さすものは時雨か、  
 はらはらと音立てて、  
 ふりゆく後のあかるさ。

## さむざむと

さむざむと渡るもの、  
 時雨、鶉、山松の風、  
 遠々に落つる月、  
 君をのがるるわがこころ。

## 小夜ふけて

小夜ふけて、松かせに  
 驚くこゑは千鳥か、  
 月ほそし、松が枝の下、  
 松が枝の松の葉の濃さ。

## 秋色二章

## みそさざし

松の根方に、はたすすき、  
 松の下枝しづえに、みそさざし、  
 赤く色づく蔦かづら、  
 風は秋かせ、みそさざし。

## もみぢ

もみぢの枝に鶴がゐて、  
 松には松雀まつづ二羽三羽、  
 どちら向いても秋の風、  
 どちら向いても秋の山。

## 雀

いや高く、  
 さむざむと、まだ、  
 揺れのこる孟宗の秀まの、  
 あはれ、その秀まに、  
 留とまりもあへぬ雀の、  
 一羽雀の、

揺られては、ちち、  
 吹かれては、ちち、  
 いづれは散りゆく日あしの  
 今は冬———すぐに雨なり。



鶺鴒  
鶺鴒

山川のたぎつ瀬の  
瀬の、瀬の岩に、  
ゐる鳥の、  
尾を振る鳥の、  
鶺鴒の、  
ふと、その岩を飛び去んぬ。

山川のたぎつ瀬の、  
瀬の、瀬の岩に  
ゐる鳥の、  
尾を振る鳥の、  
鶺鴒の、  
まだゐるやうで、寒い冬の陽。

焚  
火

一

落葉焚けばおもしろ、  
櫟くわの葉はふすふす。  
萱の葉はちよろちよろ、  
松の枯葉はばちばち。

二

ひとり焚く落葉を  
ひとりで嗅かげばおもしろ、  
山のにほひがする、  
あの頃のにほひがする。

三

落葉焚き焚き、  
ひとり遊ぶこころの

何か果敢はかなくなりけり。  
もひとつ強く燃もさうか。

## 四

赤いちよろちよろ火なれど、  
なにかしいぶる濕しめり葉、  
はうほと吹けどよしなや、  
ただ煙のみ目にしむ。

## 五

くぬぎの燃ゆるにはひは  
くぬぎの枯れし香ぞする。  
ただそれだけの事さへ、  
うれしや、冬はさみしや。

## 六

落葉焚き焚き、  
鶉の高音はきけども、  
なにかし寒しこぼれ陽、  
ただ遠遠しまばら陽。

## 七

落葉焚き焚き、  
 ただ遠遠と見てゐつ。  
 赤い女松のまばらに、  
 をりふし明る日あたり。

## 八

落葉焚くかたへに  
 見つけてふともうれしや、

龍膽りんだんが蓄たくんでゐる。  
 二つづつふくらんでゐる。

## 九

萱あやがよう燃えるわ、  
 あたたかいぞ、  
 あたたかいぞ、  
 と、云うては見れど、やつぱりさみしい。  
 黙だまつてばかりゐすとも、何か云へ、お前も。

+

陽は薄し。  
妻よ、また、  
落葉焚かうぞ、  
龍膽の花も探そぞ。

初冬の星

定價參拾錢

有所權版

刷印日二十月八年一十正大  
行發日五十月八年一十正大

秋白原北者作著

者表代スルア社會業合  
雄鐵原北者行發  
號五地新町張尾庫銀區橋京市京東

郎太源本山者刷印  
地番五十四町堅久區川石小市京東

子金木製

發行所  
東京橋區  
銀座尾張町  
會社  
ア  
ルス  
電話銀座二  
一四八八番  
振替東京二  
四八八番

白秋童謡普及版

菊 本文舶来紙二度刷	九月 中 發 刊	あ	お	鳩	夢	赤	白秋童謡普及版は、白秋氏の童謡に一流の畫家達が心をこめて描かれた美しい澤山の挿書を毎頁ごとに、挿入していつでも手にとつて歌へるやう、手軽に、親しみやすく、しかも安價な本として、母さんたち、小供さんたちのために順次刊行いたすものです。
		は	祭	の	の	い	
定 價 各 輯 參 拾 五 錢		て	の	の	小	鳥・小	
送 料 貳		床	こ	浮	函	鳥	
		屋	ろ	巢			
		小杉未醒氏畫	山本鼎氏畫	木村莊八氏畫	前川千帆氏畫	森田恒友氏畫	

アルス詩歌集

		定價	送料
北原白秋氏著	詩集觀相の秋	1.80	.17
北原白秋氏著	白秋詩集第一卷	2.80	.17
北原白秋氏著	白秋詩集第二卷	2.80	.17
北原白秋氏著	抒情小詩 わすれなぐさ	1.80	.13
北原白秋氏著	白秋小唄集	1.80	.13
北原白秋氏著	民謡集日本の笛	2.80	.18
蒲原有明氏著	有明詩集	3.50	.23
三木露風氏著	象徴詩集	2.80	.18
三木露風氏著	抒情小詩 生と戀	1.80	.13
室生犀星氏著	室生犀星詩選	2.20	.17
日夏耿之介氏著	詩集黒衣聖母	2.50	.17
日夏耿之介氏著	詩集轉身の頌	2.50	.17
萩原朔太郎氏著	詩集月に吠える	2.50	.17
北原白秋氏編	第二木馬集	1.50	.15